

青森県域における古墳時代の土器について（1）

木村 高*

1はじめに

人の移動が広範囲に及んだ古墳時代、東北北部¹⁾では弥生土器の系譜を継いだ弥生系土器²⁾、北海道から南下してきた続縄文土器、東北南部以南から北上してきた土師器と須恵器、これら4種類³⁾の土器が錯綜していた。一般的に、在地弥生土器の特徴を持つ弥生系土器は「在地系」、それ以外の3種は「外来系」とみなされているが、前期前半の土師器と中期以降の須恵器を除く外来系の多くは「在地」で製作されていた。系統の異なる複数の外来系土器が一定範囲内で在地製作されたことから、1個体の中には複数系統の属性が混淆し、るべき属性は消失し、故地にも在地にも存在しない属性が新たに加わる等、東北北部の外来系土器は、様々な背景を持ちながら「在地化」していった（木村高2011）。

下図は東北北部から出土した古墳時代の土器である。口縁部に製作者の創意が大胆に加わった弥生系土器（7）や、縄文時代晩期の壺を模したとしか思えない個体（3）、ゴブレットグラス状の器形を呈す続縄文土器（1, 2）、独特な器形のために類例が見つからない土師器（5）、オホーツク式土器（十和田式？）との関係を想起させる続縄文土器（6）等、これらはいずれも属性の混淆、変容、新規追加、欠落等の現象を具体的に物語る好例である。

我々が編年研究に用いる基本的思考法を根底から揺さぶるようなこれらの方は、古墳時代の東北北部における土器製作の背景が、非常に複雑なものであったことをよく示している。下図のような土器は「異質なもの」として、型式学的な検討対象からは外されがちであるが、東北北部における古墳時代の土器様相を直接的に示すことから、これらについてはむしろ積極的に議論される必要がある。

本稿では、古墳時代研究ないし続縄文文化研究の俎上にまだ載せられていない県内出土土器について、編年の位置の特定を試み、その過程で生ずる様々な問題点に触れながら、東北北部における古墳時代土器の製作背景に関する予察を述べる。



図1 東北北部における古墳時代の土器 (S=1/4)

(1, 2, 5: 青森県七戸町猪ノ鼻(1)遺跡(木村高2021) 6: 青森県八戸市市子林遺跡(大野亨2004) 3, 4, 7: 秋田県能代市寒川II遺跡(小林克1988))

2-1 青森県弘前市 神原(2)遺跡出土土器 (青森県埋文セ 2013『神原(2)遺跡』青埋報第530集)

県西部、津軽平野の南西に位置する岩木山(独立峰:標高1,625m)の麓には、多数の遺跡が分布している。それらの1つである神原(2)遺跡は、北東麓の段丘南斜面に立地し、2.2kmほど北には、国内最北の水田遺構で名高い砂沢遺跡が立地している。調査では、縄文時代中期中葉～晩期の集落や縄文時代前期中葉の捨て場、古代以降と推定される溝跡と土坑が検出されている。

ここに取り上げる土器(図2-1・3-1)は、非常に珍しい器形の小型脚付鉢であり、遺構外(Ⅲ層)から出土したものである。類例は管見の限り見当たらないが、報告書の本文には、「古墳時代以降の土器 古式土師器と考えられる台付鉢が出土した。外面および口唇部にハケ目による調整が確認できる。鉢部と台部の接合痕が明瞭に残る粗い製作であり、在地産の可能性が高い。」と記され、観察表には「平口縁、口唇部上面に刻み、縦位の刷目^(ママ)」と記されている(成田滋彦2013)。

共伴資料が存在しない点に触れず、類例の提示も無く、時代認定の根拠や土器種別の確定に至る説明も無いが、報告書には「古墳時代」、「古式土師器」と明記されている⁴⁾。以下では、本資料が古式土師器であるのかどうか、そもそも古墳時代の所産で間違いないのかどうか、こういったレベルから編年的位置の推定を試みる。

器形に着目すると、本資料のような柱状中実脚を持つ鉢形土器を縄文土器の中に見いだすことはできない。部分的に類似するものは、弥生時代以降の資料に散発的に認めることができるが、大勢を納得させ得るほどの類例は皆無である。よって以下では属性を個別に検討していく。

胎土・焼成・成形・器面調整の4属性に着目すると、胎土には砂粒・海綿骨針・軟質な赤色粒子が含まれており、焼成は堅緻で橙色、成形は報告書に記されているとおり「鉢部と台部の接合痕が明瞭に残る」手づくねによる。器面調整は外面ハケメ、内面ナデ、外底面ケズリである。これら属性の組成より、本資料は弥生時代から奈良時代の中に収まる可能性が高く、種別は弥生土器あるいは土師器と推定される。なお、報告書の観察表には「口唇部上面に刻み」とあるが、これは「刻み」ではなく、「ハケメ」である。

鉢部はきわめて単純な形をしているが、在地色が強いためか、この部位だけに限定しても類例はやはり見いだされない。口唇部断面形は角形を呈しているが、口縁部～体部にかけての残存範囲がそもそも少なく、「平口縁」であるか否かも不明である。よって、弥生土器か土師器かの判別すら不可能である。しかし、橙色に焼成され、ハケメが明瞭に残る無文の弥生土器が青森県域で出土する可能性は極めて低いことを考慮すると、本資料は土師器である可能性が高い。

なお、内底面には煤状炭化物の付着があり
られ、本資料の用途を推定する上で有効である。

最後に脚部に注目する。柱状で中実を呈する本例のような脚部を、国内の弥生土器と土師器の中に探索してみると、中空の脚部に比べればごく少数であるものの、弥生時代中期～古墳時代中期の期間内に存在し、製作時期の主体は弥生時代後期から古墳時代前期のようである。

この時期に属す県内資料は極めて少ない
が、図3-2の青森市野尻(1)遺跡の弥生土



図2 神原(2)遺跡出土土器 (左:報告書掲載写真・右:筆者撮影)

器(茅野嘉雄2002：弥生時代中期後葉～後期前葉：念佛間式系・天王山式系)と図1でも紹介した図3-3の七戸町猪ノ鼻(1)資料(木村高2021：古墳時代前期[3世紀後葉～4世紀前葉]：後北C2・D式)の2点は、文様は全く異なるが、器形とサイズの面にやや類似性を認めることができる。

これら野尻(1)資料と猪ノ鼻(1)資料の脚部は、揚げ底状ないし高台状の底部がハの字に開く、いわゆる「台付」の類であり、神原(2)資料の「柱状中実の脚部」とは成形技法が全く異なる。しかしこれらは、柱状中実脚の全国的な存在期間に並行していることと、土器資料の絶対数が少ない時期に存在しているという、偶然とは考え難いこれら2つの理由から、神原(2)資料との関連性を否定することはできない。

なお、神原(2)遺跡からは、地点は離れているが、弥生時代後期の資料(図4)が出土しており、「六ヶ所村家ノ前遺跡第VII群土器(青森県1994)に相当するものと考えられる」と報告されている(成田滋彦2013)。この資料は家ノ前遺跡第VII群ではなく、第VIII群(神1994)に並行するものと考えられ、文様に沿った赤彩の塗り分けと顔料の色調は、天王山遺跡出土の天王山式(鈴木功ほか 2021：弥生時代後期)などによく類似している。

青森県域における天王山式系統の土器に赤彩が施される例は非常に少ないが、神原(2)資料からこのような個体が出土していることは、土器に対する意識が他の県内遺跡よりも南東北的だった可能性がある。そのような見方からすると、図3-1も南東北的な思考の中で製作されたものかも知れない。当時の青森県域は、壺や高杯を使用しない文化圏であったために、上半が鉢(在地)、下半が柱状中実脚(南東北以南)という属性の混淆、変容が起こったのであろう。

以上、神原(2)資料の編年的位置を狭い範囲に絞り込むことは困難であるが、現時点では弥生時代後期から古墳時代前期という広い時間幅に位置づけておき、ハケメが明瞭に残る無文の弥生土器が青森県域で出土する可能性は低いことを根拠に、本資料については古墳時代前期の古式土師器の影響を強く受けた土器であると解釈しておきたい。

2-2 青森県西目屋村 川原平(4)遺跡出土土器 (青森県埋文セ 2016『川原平(4)遺跡IV』青埋報第566集)

県の南西域に位置する西目屋村は、津軽平野を広く潤す岩木川の上流域にある。川原平(4)遺跡は村役場からさらに9km上流の岩木川と、支流である大沢川の合流点近くに立地し、北北東には岩木山が、南西一帯には世界自然遺産「白神山地」⁵⁾が聳え、周辺には多数の縄文時代遺跡が分布している。調査では、縄文時代中期から晩期にかけての集落が検出されており、南西には晩期の拠点的集落で著名な川原平(1)遺跡が隣接している。

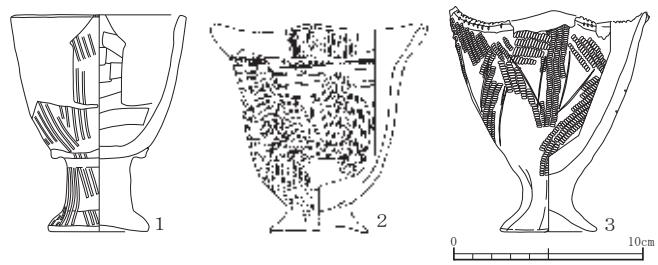


図3 脚部の「違い」と器形・サイズの「類似」

(1: 弘前市神原(2) 2: 青森市野尻(1) 3: 七戸町猪ノ鼻(1) S=1/4)

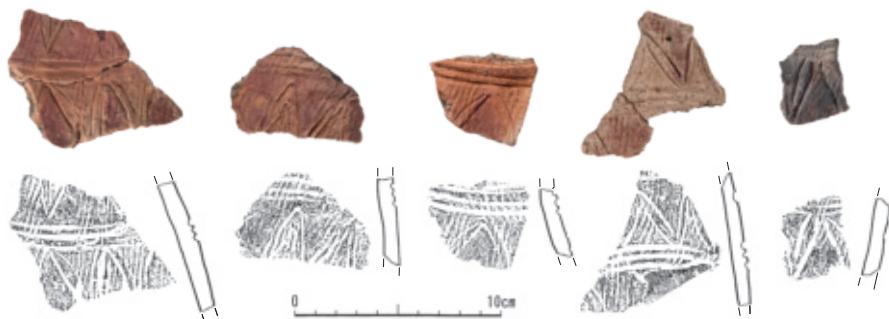


図4 神原(2)遺跡出土弥生土器

ここに紹介する資料(図5・図6-1)は、古墳時代には属さない可能性を持つものであるが、北大式土器と擦文土器、いわゆる沈線文をもつ土師器との関連を考える上で重要であることから本稿の対象とした。

報告書では「古代」の「土師器」とされており、「口縁部に鋸歯状の沈線をもつ甕で、第Ⅱ層中から出土した。口縁部は4分の1ほどが残存し、口径は推定で17cmである。胴部の最大径が上位に位置し、口縁部が大きく外反する器形である。胴部・頸部の境や口縁端部は、やや稜が立つ。鋸歯状の沈線は、横位沈線を伴い数段構成となる。器面の剥落や磨耗のため部分的に観察が困難な箇所もあるが、横位沈線は、胴部と頸部の境界で1条、頸部の中間に1条が観察される。鋸歯状の沈線は、2条単位を基本として横位沈線施工後に描出される。外面調整は、口縁部がヨコナデである他は、縦位方向のヘラナデがみられる。内面調整は、ヘラナデ後にミガキ調整がなされるが、輪積み痕を残す。」と記されている⁶⁾(最上法聖2016)。

川原平(4)資料に円形刺突文は施されていないが、報告書に記載された「鋸歯状の沈線」「横位沈線を伴い数段構成」「2条単位を基本」という文様の特徴は、図6-2の北海道千歳市ウサクマイ遺跡C地区出土資料(西蓮寺1979)に類似している。

このウサクマイC地区資料は、宇田川洋(1988)による擦文土器の「5期区分」⁷⁾によれば、最古期に相当する「擦文早期」に位置づけられているが、一方で鈴木信(2021)による続縄文土器の編年によると、同資料は「北大III」の古段階である「古2」に位置づけられている⁸⁾。

川原平(4)資料とウサクマイ資料の大きな違いは、口縁部に巡らされる円形刺突文の有無である。川原平(4)資料には円形刺突文がみられないため、北大式よりも時間的に降下するものと考えがちになるが、円形刺突文は北海道においても全ての北大式に施されるものではなく、特に青森県域であれば、属性の欠落現象を示している可能性もある。このことから、円形刺突文が無いことを根拠に、本資料の時期をいたずらに降下させることは危険である。

川原平(4)資料の編年的位置の推定にあたっては、このウサクマイC地区資料を北大式と擦文土器のどちらに含めるかが大きな問題…、この問題の解決なくして川原平(4)資料の解釈は不可能…。これまでこういった思考に陥りがちであったが、この背景には、北大式の周辺をめぐる過去の



図5 川原平(4)遺跡出土土器
(沈線は非常に浅く、写真では表現が難しい)

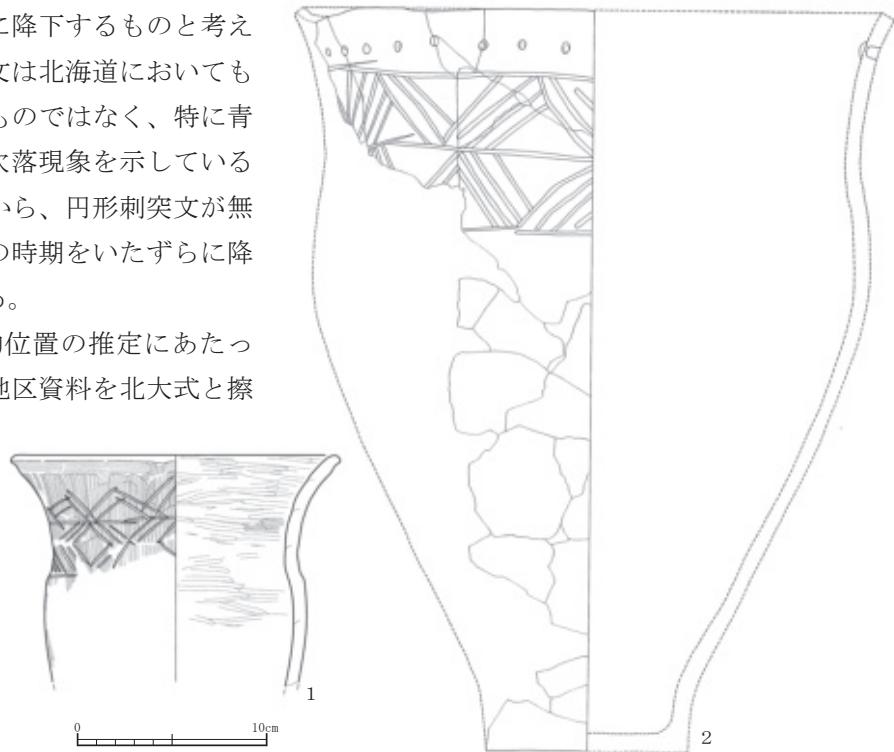


図6 左：川原平(4)遺跡出土 ・ 右：ウサクマイ遺跡C地区出土 (S=1/4)

複雑な議論が一因にある。以下では、北大式と擦文土器に関する研究史を振り返っておく。

(次稿につづく)

註

- 1) 秋田県秋田市と岩手県宮古市を結ぶライン以北を指す。
- 2) 古墳時代前期まで存在する弥生土器の系譜上に属す資料を指す(木村高1999)。
- 3) 基本的に、4種類が並存するのは弥生系土器が残る古墳時代前期までであるが、中期以降にまで存在する「異質なもの」を含めた場合、「4種類」の並存期間は短くないと考えることも可能である。
- 4) この資料については、神原(2)遺跡の報告書を作成していた成田滋彦氏から時期と種別について質問された経緯がある。全く見たことの無い資料に驚きつつ、筆者は、消去法で絞り込んだ場合に限り、古墳時代の土師器に関連する可能性がある、といった内容で回答した。報告書には時期不明の資料として掲載されるものとばかり思っていたが、「古墳時代」、「古式土師器」と報告されていて、驚愕した。時期と種別に関する解説が報告書に無い状況より察すると、「古墳時代」、「古式土師器」の2語は、筆者の助言が活字化された可能性がある。なお、土師器に「古式」を冠するのは、須恵器登場以前の資料に限るのが原則であることから、報告書記載の「古式土師器」の用語は、古墳時代前期という時期を特定していることに等しい。報告書に求められるのは、時期や種別を安易に記すことではなく、出土遺物そのものに関する事実を客観的に記すことであると筆者は考える。
- 5) 白神山地は広大な山塊の総称であり、「世界遺産登録地域の白神山地」はその中心地域に存在している。川原平(4)遺跡は「登録地域外の白神山地」の中に所在している。
- 6) 非常に丁寧な報告内容であり、追記事項等は無い。あえて加えるならば、外面の縦位ヘラナデがハケメ状を呈している点である。しかしこれについては実測図に反映されており、問題ない。なお、報告書抄録の要約に「鋸歯状沈線文をもつ土師器」とあり、引用・参考文献の中にも、沈線文のある土師器に関する論文が含まれていることから、報告書作成時は、土師器の範疇で追究されていたのものと推測される。
- 7) 宇田川洋は1980年の『北海道考古学講座』のなかで「早・前・中・後・晩期の5期区分」を行い、1988年にその簡略版を『アイヌ文化成立史』に掲載している。簡略版は、各期の典型例をわずか5個体の土器で説明しており、ウサクマイC地区資料は、「早期」の代表例として取り上げられている。
- 8) 鈴木(2021)は、「北大各式には一時期の並行が認められるので、「北大I式」→「北大II式」→「北大III式」とならない。」(P85)とし、円形刺突を持つ後北C2・D式と北大式および初期の擦文土器をまとめて「円形刺突文土器群」(P97)と呼び、「文様と最終調整」(P97)に基いて、「北大I」「北大II」「北大III」「刺突文」「円形刺突文」「無文」に細分類」(P97)している。鈴木による「北大III」は、この再分類名の1つであり、森田知忠(1967.5)による「北大III式」や斎藤傑(1967.11)による「北大III」とは微妙に異なるものである。なお、鈴木による2003年編年では、2のウサクマイC地区資料は、「北大III」の中段階である「中1」に位置づけられている。

引用文献

- 宇田川洋 1980『北海道考古学講座』みやま書房
 宇田川洋 1988『アイヌ文化成立史』北海道出版企画センター
 大野 亨 2004「市子林遺跡の調査(6次C)」『八戸市内遺跡発掘調査報告書18』八戸市埋報第102集 八戸市教育委員会
 木村 高 1999「東北地方北部における弥生系土器と古式土師器の並行関係－続縄文土器との共伴事例から－」
 　　『研究紀要』第4号 青森県埋セ
 木村 高 2011「東北地方の続縄文文化」『講座日本の考古学7 古墳時代(上)』青木書店
 木村 高 2021「古墳時代」『猪ノ鼻(1)遺跡』青埋報第616集 青森県埋セ
 小林 克 1988「続縄文文化期の遺構と遺物」『寒川I遺跡・寒川II遺跡』秋田県埋報第167集 秋田県埋セ
 斎藤 傑 1967.11「擦文文化初頭の問題」『古代文化』第19巻第5号
 西蓮寺健 1979『ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査』千歳市文化財調査報告書IV
 神 康夫 1994「弥生時代後期に属すると思われる土器」『家ノ前遺跡II・鷹架遺跡II』青埋報第160集 青森県埋セ
 鈴木 功・鈴木一寿 2021『天王山遺跡－確認調査報告－』白河市埋蔵文化財調査報告書 第84集
 鈴木 信 2021『北海道続縄文文化の変容と展開』同成社
 鈴木 信 2003「道央部における続縄文土器の編年」『千歳市ユカンボシC15遺跡(6)』北埋報第192集 北海道埋セ
 茅野嘉雄 2002「弥生(続縄文)時代の土器」『野尻(1)遺跡IV』青埋報第320集 青森県埋セ
 成田滋彦 2013「古墳時代以降の土器」「縄文時代早期・中期～後期、弥生時代の土器について」『神原(2)遺跡』
 　　青埋報第530集 青森県埋セ
 最上法聖 2016「土師器」『川原平(4)遺跡IV』青埋報第566集 青森県埋セ
 森田知忠 1967.5「北海道の続縄文文化」『古代文化』第19巻第2号